

大境洞窟 調査100年

とっておき埋文講座②

氷見市立博物館 館長 大野 究

発見から調査へ

明治40年に氷見市大境沖に新式の定置網がおろされて豊漁が続きました。大境の村の人たちは豊漁が続いたので家を建て替えたり瓦をふきかえたりしました。

大正6年は、春網でイワシが大豊漁で、前年の15倍くらいイワシが獲れています。イワシは肥料に使われてたので非常に実入りが大きいものでした。そこで、大境の村の人たちがお宮さん(白山社)を建て替えようという話が持ち上がります。それまでのお宮さんは、江戸時代に建てられたもので洞窟の中に本殿があるだけで拝殿がないものでした。お祭りのときは本殿の前の地面にむしろをひいてお祭りをしていたので、これを機会に本殿を新しく改築して拝殿も新築しようということになったよ

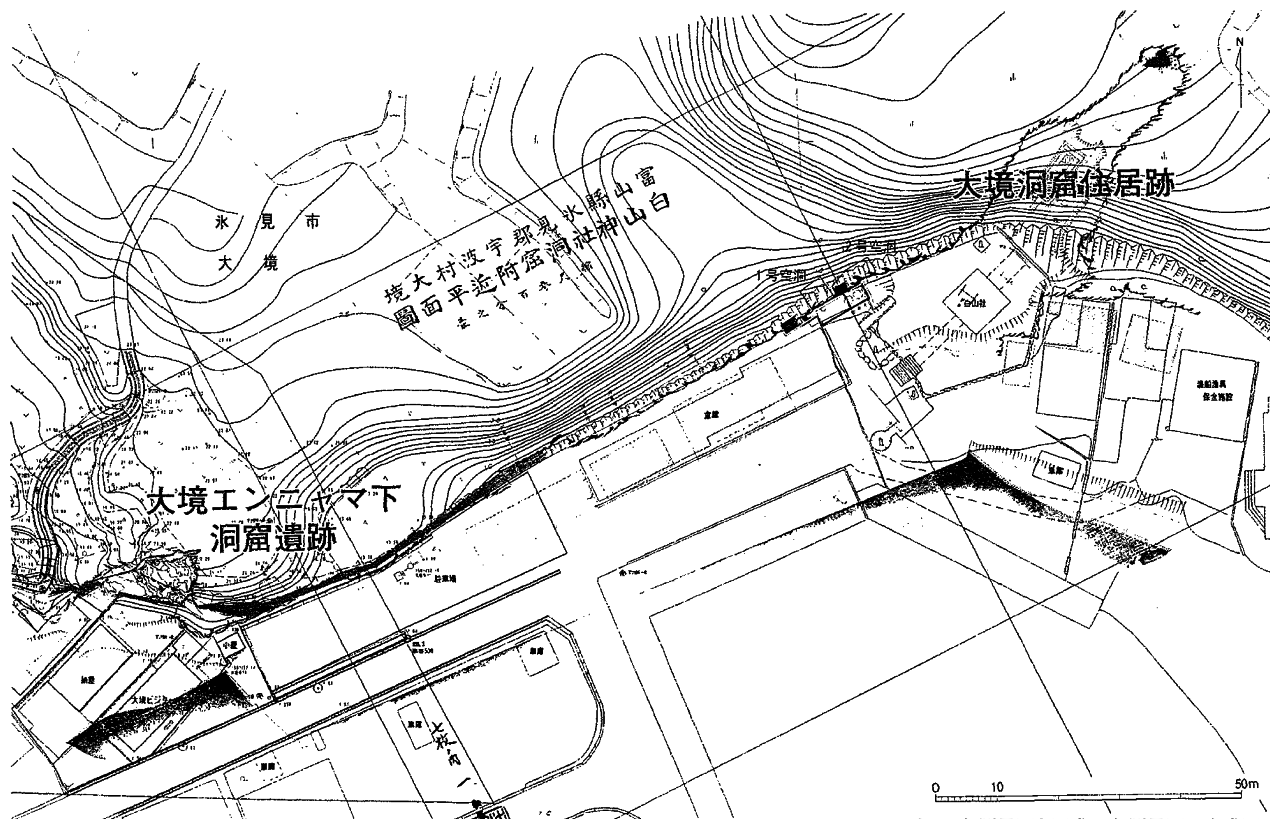
うです。大正6年12月に県知事に申請をし、大正7年6月に許可がおりて工事をはじめました。洞窟には天井があるので、本殿を大きくするためには下を掘り下げなければなりません。地面を掘り下げたところそこから土器や石器や骨がたくさんでてきました。そこで駐在さんがきたりして大変なさわぎになりました。

6月20日ごろから遺物の出土がありました。そのさわぎを聞いて新聞記者が現地を訪れます。高岡新報の井上江花です。写真の真ん中で帽子をかぶってステッキを持っている人が井上です。井上の右側に大きな石棒が立っています。石棒がでてきたことが大騒ぎになった原因の一つです。長さ95cmの大型の石棒が縄文時代の中期のものです。



大正7年7月3日の「高岡新報」の写真

その周りにも土器や人骨がでてきています。はじめは県内のニュースでしたが、7月1日の東京朝日新聞の欄外記事が掲載されました。それを見てびっくりしたのが、東京帝国大学の柴田常恵です。「これは大変なことが富山県でおきている」ということになり、3日の夜行列車に飛び乗り氷見にこられました。そして現地で「これは重要な遺跡ですよ」ということを伝えています。なぜ重



大正7年測量図と平成18年測量図の合成図
(氷見市教育委員会 2013年『国指定史跡大境洞窟住居跡保存整備事業報告書』)

要な遺跡かという、日本でも大森貝塚などオープンサイトではたくさん調査されていましたが、洞窟の遺跡が発見されていませんでした。ヨーロッパでは洞窟の遺跡がけっこうあり研究されていて日本にも洞窟遺跡がないものかと考えているときだったようです。柴田が目したのは、洞窟は落盤によって積み重なるので、洞窟の地層は下が古くて上が新しいことが確定できることです。オープンサイトの場合は自然災害などによって古いものが新しいものに乗っかることがあります。洞窟にはそれがありません。大境洞窟は6つの文化層が積み重なっていました。大境洞窟を地層ごとにしっかり発掘していくことで、時間のものさしができるということです。そのことで、当時、縄文と弥生のどちらが古い地層的にあきらかにすることができました。こうして日本で初めてとなる洞窟遺跡の発掘調査が行われました。

測量図面

柴田常恵は発掘調査をするときに、考古学研究者がびっくりすることをしていきます。それは測量図面をきちんととっているということです。現在では遺跡の平面図をとったり断面図をとったりするのは当たり前ですが、100年前は遺跡に行き、土器などの遺物を集めてくるのが普通でした。それぞれの遺物がどの地層から出てきたのかを記録しながら発掘するのはあまり行われていませんでしたが、日本で初めての洞窟遺跡の発掘調査なので、しっかり記録をとらなくてはならないと考えて発掘されたと考えられます。

この時の測量図面が全部で7枚あります。これらは、柴田が調査のときに富山県庁から技師を派遣してもらって、作製させた図面です。1枚目は洞窟の平面図です。これで当時の洞窟の様子がよくわかります。この図面を今から10年ほど前に現地を測量したものと重ねると、ちょうど崖の面などがぴったりと合致します。

このことからとても正確な図面であることがわかります。また、洞窟だけでなく海岸線や漁師さんの倉庫などもかいています。

さらに大境洞窟と同じ海食洞窟の大境エンニヤマ下洞窟も測量しています。この洞窟は今から10年ほど前に急傾斜工事に先立って発掘調査をしており、少量の土器や動物の骨が出土しました。100年前、すでにこの洞窟に着目していたことがわかります。

断面図には、地層の積み重なりの様子が書いてあります。上から順に第1層から第6層まであります。この発掘の結果、第6層が縄文時代で第5層が弥生時代という事が分かり、縄文時代が弥生時代の前であることが分かりました。このような測量図面を100年前に作っているということは画期的で、学術的にも貴重であると言えます。

この調査をうけて、大正11年3月8日には大境洞窟住居跡は朝日貝塚と共に国の史跡になっています。このときの指定は、史跡名勝天然記念物の法律ができて2回目の史跡指定でした。最初3回の史跡指定は、古墳や国分寺跡に加えて、箱根関所やシーボルト屋敷など新しい時代のもので多く含まれていました。その中で縄文時代としては初めて、大境洞窟と朝日貝塚が指定を受けたのです。富山県の史跡としても初めてのものだったのです。大正時代に指定された史跡が富山県にあるということは大変意味のあるものでした。

新聞記者 井上江花の視点

柴田常恵らによる調査を何度も取材したのが井上江花でした。

一番上の記事は大正7年の7月2日の記事で、初めて取材したときのものです。「大境洞窟」を書いてあります。いかにも人目を引くためのものですが、柴田常恵が来県した7月5日には、「すごい遺跡ときいた」ということを記事にしています。さらに、発掘調査が終わったころの10月3日には「考古学界の宝庫である」と記事にしています。はじめは興味本位だったのが、中央からきた学者に取材をして記事を書く中で、最後には遺跡を保護し地元にも遺物を置いておくべきだという自分の考えを記事にしています。大境洞窟の発掘調査は新聞記者にも恵まれて、非常によい報道をされていると思います。



「高岡新報」記事から(上:大正7年7月2日、中:大正7年7月5日、下:大正7年10月3日)

洞窟についての話

大境洞窟は南西方向をむいて開いています。日当たり良好で北風が入りません。さらに洞窟の一番奥に湧水がありました。地元の人に聞くと昔はたくさんの水がでていたので汲みに行っていたそうです。水も湧いているという事でライフラインがそろっているよい「物件」であったといえます。この洞窟は海食洞窟といって波の作用でできた洞窟です。いつできたかという、縄文時代のはじめころと考えられています。縄文海進のころは、現在より海水面が4～5メートルくらい高かったので、その時期に波があたってだんだんうがかれていって洞窟が形成されたと考えられています。洞窟が海拔5メートルくらいあることもそのことを物語っています。

縄文時代の中ごろになると海水面が現在ぐらいに下がって、洞窟内に海水がはいってこなくなって、縄文人が利用するようになったと考えています。大境エンニヤマ下洞窟も同じ方向をむいているので同様の条件だろうと考えています。

一番下の地層が縄文時代の中ごろになります。大境洞窟は「住居跡」と名前がついていますが、発掘当時住居なのかお墓なのか議論になりました。ただ、調査では貝塚のように動物の骨や貝殻、灰層が確認されたため住居跡とされました。この層からは縄文時代の中ごろから後葉、後期の土器がでてきています。そのころには、朝日貝塚をはじめ北代遺跡や不動堂遺跡でも住居を作って住んでいます。洞窟にずっと住むというのは違和感があるので、ムラが別にあるって、洞窟へは出稼ぎにきていたのではないかなと考えています。ここに来れば、海の幸、山の幸を手に入れることができます。大境洞窟の第6層と並行する一番近い遺跡は朝日貝塚になります。二つはひょっとしたらつながりがあるのかな、と遺跡分布から予想することができます。

大境洞窟と朝日貝塚は9kmくらい離れていますが、縄文人は舟ももっているの、海上を行き来したのではないかと考えられます。つまり、大境洞窟を利用したのは朝日貝塚の人たちだったかもしれないという事です。

大境洞窟からでたものという、動物の骨が多くでています。動物の骨の中で一番多いのはシカとイノシシです。シカやイノシシは食べるだけでなく、骨にも価値があります。骨角器といって骨や角でいろいろな道具をつくっています。そういった骨角器もたくさん出土しています。

第6層の上にのっているのが第5層です。弥生時代の初め頃の地層になりますが、弥生時代というのは、日本列島全部が縄文から弥生に一齐に変わったわけはありません。九州の方からだんだん広がっていったものです。

北陸のあたりに弥生時代の文化が到達するのは前期の終わりの方と考えられています。時間差があるので、縄文時代最後から弥生時代に切り替わる頃が第5層です。氷見で一番初めに弥生文化が入ったのは大境洞窟です。大境は海から集落があつてすぐ後ろが山になっています。弥生時代は米作りの時代と教科書に出っていますが、氷見に弥生時代が来たといってもコメを作るところがないではないか、つまり氷見に弥生文化を持ち込んだ人は漁労民だったのではと考えられています。このあと、なかなか氷見で弥生時代の遺跡が増えません。氷見では中期の遺跡がいくつか見つかっていますが短期間で途絶えてしまいます。後期の後半から弥生時代の遺跡がふえはじめます。これは氷見だけではなく富山県の特徴であるといえます。

その後の大境洞窟は、弥生時代の終わりの頃の地層があつて、古墳時代、奈良・平安時代、中世(室町時代)と続きます。江戸時代には神社があるという記録があります。いつまで住居跡であるかという問題がでてきます。第4層の弥生時代の地層では、派手な装飾、赤く塗っ

たりするものが出てきます。住んでいたというよりは、祭りを全部でする場所だったのではないかと考えることができます。それは古墳時代もそうです。また、奈良時代のころになると、製塩土器がでてきます。口がらっぱのような形をしていて、底を地面に突き刺して海水をいれて煮詰めて塩をとるものだったと考えられています。

中世になると、四角い石の先端がとんがっているような板石塔婆などの石造物があります。石材は大境洞窟周辺の岩盤のやわらかいところを使っています。藪田層と呼ばれる地層なので藪田石といっています。砂よりさらに粒の細かいものです。最近の研究で藪田石の石造物は氷見だけでなく県内一円に流通していることがわかっています。立山や五箇山や黒部にも運ばれています。県内の中世石造物は銘が入っていないので時代を見定めるのが難しいです。輪切りにした断面が正方形になるものが鎌倉時代で、時代が下る断面が長方形になるのが室町時代、15世紀くらいかなと考えています。これはお墓としてたてたり、供養塔としてたてたりするので、洞窟が信仰の場となっていることを表しています。洞窟の壁面を見ると左の方に、小さくぼみがいくつか掘られています。ひょっとしたらそこに石造物がおさめられていたかもしれません。

おわりに

百年前に発見・調査された大境洞窟ですが、この遺跡から学べることはまだまだありそうです。皆さんにもこの機会に大境洞窟に興味をもち、できれば現地も訪れてもらえればと思います。

(平成30年9月9日第2回県民考古学講座)